
電話オバケ

両角忘夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電話オバケ

【Nコード】

N1497A

【作者名】

両角忘夜

【あらすじ】

彼女と部屋で寝転び、携帯電話を触りながらくつろいでいた僕に、〈僕〉から電話がかかってきた。僕は〈僕〉の嘘を暴くべく、理屈で立ち向かったが……

その夜、一つの部屋の一つのベッドで、僕たちはお尻とお尻を向けあって寝転び、君は古本屋で買いしめた『エースをねらえ!』第7巻を、ときおりクスクス笑いながら、僕はル・コルビュジエなんかの載った建築雑誌をそれぞれ読んでいた。

BGMはレイジ・アゲインスト・ザ・マシーン。トム・モレロのギターが最高。どんなエフェクターを使えば、こんな面白い音が出るのだろう。そんなふうに意識の五分の一くらいで思いながら、残りの五分の四で字や写真をなぞった。

その頃、世間では、憲法改正や、郵政民営化や、年金問題が与党や野党などにより思案されていた。あるいは、女性専用車両の導入や、白装束のカルト宗教団体や、多摩川に迷い込んだアザラシがニュースになっていた。

そのうち建築雑誌に飽きた僕は、なんとなく、そばで充電していた携帯電話に手を伸ばしていじりだした。

こんな夜、こんなふうに何かに飽きたり疲れたりして、携帯電話を触る人はどれくらいいるんだろう。

そんなことを思いながら携帯電話を指でいじっていると、突然知らない男の声で「もしもし」と聞こえた。耳に当て、「はいはい」と返答する。

「ああ、びっくりしました」。男は言った。

「番号を間違えましたか」。僕は訊いた。

「いえ、番号は正確なはずですが。とても声が似ていたものですか」

「誰にですか」

「自分にです」と男は言った。

妙なことを言う奴だ。僕は彼の声を聞き、すぐにく知らない声>だと判断した。だから、男が僕と声が似ているという意見には同意で

きない。

「ところで、あなたは誰ですか」。僕は訊いた。

「僕は私です。つまり、私はあなたなんですよ」。男は妙なことを言うのだった。

つまり、これはありきたりな夜にかかってきた、所謂イタズラ電話という類いであろう。

ここで一般的日本人として普通の判断をするなら、即座に会話を中断して電話を切れば済むことだ。だが僕は、なんとなくその妙な電話に付き合ってしまった。

「しかしあなたが僕と同一人物だと言うのなら、それを証明してみてください。いただきたいものです。じゃないと、マトモに考えて、まったく納得できない話です。僕はこの世にただ一人、ここにしかいませんからね」

「それはそうです。私があなたなら、やはり相手にそう言うでしょう」

「あッ、今あなたは、＜私があなたなら＞と仮定して言いましたね。つまり、これでもう、あなたは僕ではないと実証されたわけだ」

これで相手を論破できたと思った。相手は僕に反論できず、非礼を謝り、恥じて電話を切るであろう。

ところが男は平気な口調で、謝ることもなく会話を続けた。

「まあ、とりあえず聞いて下さい。今夜8時、私は仕事を終えて家に帰ってきました。続けて彼女も帰ってきました。私たちは別々に外食を済ませて帰ってきたので、軽くキスをし、ベッドに寝転んでそれぞれの本を読み始めました。彼女は帰りに古本屋で買った『エースをねえ！』第7巻をクスクス笑いながら、僕はル・コルビュジエなんかの載った建築雑誌をです。ところが僕は、そのうち読書に飽きてしまった。彼女はまだ漫画に夢中だったから、仕方なく僕は手を伸ばして携帯電話をいじりだしたのです。こんな夜、こんなふうに何かに飽きたり疲れたりして、携帯電話をいじっている

人はどのくらいいるのだろう、と僕はぼんやり想像しました。……すると君から電話がかかってきたのです。……やはり我々は、することも考えることも同時なんですね」

ありきたりな表現だが、背筋がゾツとした。こいつはどうやら俺らしい、理屈を越えてそう実感した。慌てて電話を切る。

こんな怖い電話を隣でしていたのに、彼女はまだ漫画本に熱中し、クスクス笑ったりしている。こんなふうに彼女が僕を忘れてしまうから、変なアチラの世界とつながったりしてしまうのだ。

すぐに僕は彼女から漫画を奪い、熱い熱いキスをした。すると彼女は僕を思い出してくれたので、それで、やっとやっと安心できたんだ。

【追記】 考えていることはともかく、何時に帰ったとか、ベッドで別々に読書していたなんてことは、部屋のどこかに隠しカメラを設置して見ていればわかることである。

それで相手が、自分と同一人物だと偽る電話をしてきたのだとしたら、これこそ、とんでもないイタズラである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1497a/>

電話オバケ

2010年10月15日22時53分発行